

第5回高エネルギー加速器研究機構技術職員シンポジウムに出席して

技術センター 医学部等部門
辻村 智隆

技術センター 工学部等部門
向井 一夫

1. はじめに

平成17年3月17日(木)と18日(金)の両日、茨城県つくば市の大学共同利用機関法人 高エネルギー加速器研究機構で、「技術職員シンポジウム」が開催された。

技術職員の技術の向上と活性化を目的に、高エネルギー加速器研究機構(K E K)技術部連絡会議が主催してのシンポジウムで、多くの(国立)大学・(国立)高等専門学校・大学共同利用機関等の技術職員が参加して報告・情報交換・意見交換が行われた。昨年は、「研修、技術交流、人事交流の実施状況・課題等について」の報告・意見交換がなされ、第5回目となる今回は、「各機関の法人化後の状況についての報告」を主なテーマとして実施された。技術センターに全学技術職員が集約されたという全国的にも数少ない形の組織化に踏み切った広島大学も、その現状報告・経緯・課題等を報告し、又、他機関も注目している「技術職員一元化について」を発表した。



【KEK全景】

16大学(27名)、1高等専門学校(3名)、6研究機構等(37名)、合計23機関(67名)が参加し、広島大学技術センターからは、向井一夫(工学部等部門)と辻村智隆(医学部等部門)の2名が出席した。



【シンポジウムの行われた4号館】

2. 研修内容

国立大学・国立高等専門学校・大学共同利用機関等が法人化され、各機関技術部では、組織・運営体制、業務内容の見直し、効率化、技術の向上策等について、様々な再編・改革が実行・検討されている。とにかく出港し航海に出て1年を迎えようとしているこの時期に、各機関の改革・方向性等を決定するための参考に資するため、それぞれの機関の法人化後の現状や課題について、状況発表・情報交換・意見交換が行われた。

シンポジウムは、冒頭に機関長代理の小林誠素核研究所長が挨拶をされ、高エネルギー加速器研究機構(K E K)技術部連絡会議の技術調整役の徳本修一氏の挨拶と続いた。

大学、大学共同利用機関において、「技術職員のあるべき姿が明瞭になっていないのでは」「技術職員としてのビジョンが必要ではないか」「各機関残された課題も少なくはない」など、「このシンポジウムで方向性の提示がなされたら良いと思う」との挨拶があった。また、新聞記事のコラムに「1人の天才が出て、100人の凡人がその天才を理解して事が進むと言われる」という中国故事にちなんで、「天才を教育により生み出すことは出来ないが、100人を教育することなら可

能であり、そのための政策が大事である」という主旨の話があり、これは技術職員に置き換えても同様で、「100人を育てる」こと、すなわち資質の向上、技術の継承に組織的に取り組むことは私達にも出来る。このシンポジウムで広く意見を伺いたいと思うと挨拶された。

続いて「FFAG加速器について」と題して森義治教授が特別講演された。「KEKは、組織だって研究するところだから、自分たちがおこなっているうまくいくかどうか分からないようなプロジェクトは、なかなかバックアップしてもらえない。個人的ボランティアなサポートを受けて研究している」と厳しさを報告された。しかしこの加速器の方式は、「小型化できるので医療への応用が期待される」と分野の違う私達にも理解できるように講演された。

続いて後述プログラムの通り、松岡健次（大阪大学）・戸田信(KEK)両氏の司会により1・2日目の日程を終了した。

【3月17日】

- 13:30～13:35 機構長(代理)挨拶 小林 誠
- 13:35～13:45 技術調整役挨拶 徳本 修一
- 13:50～14:40 特別講演 森 義治 教授
- 15:00～17:00 状況報告

議長：松岡 健次，戸田 信
書記：田原 俊央，川村 真人

1. 高エネルギー加速器研究機構
徳本 修一
2. 自然科学研究機構 核融合科学研究所
山内 健治
3. 宇宙航空研究開発機構
並木 道義
4. 自然科学研究機構 分子科学研究所
吉田 久史
5. 自然科学研究機構 生理学研究所
小原 正裕
6. 北海道大学
堀 健一郎
7. 山形大学
菊地 新一
8. 秋田大学
伊藤 芳昭
- 17:00～18:00 意見交換-1

【3月18日】

- 9:00～11:00 状況報告
- 9. 熊本大学 上村 実也
- 10. 横浜国立大学 道山 俊一
- 11. 一関工業高等専門学校 三浦 文雄
- 12. 東北大学 阿部 比佐久
- 13. 自然科学研究機構 国立天文台
宮地 竹史
- 14. 広島大学 辻村 智隆
- 15. 広島大学 向井 一夫
- 11:00～12:00 意見交換-2
- 12:00～12:15 まとめ
山内 健治
- 12:15～12:20 閉会挨拶
舟橋 義聖



【向井一夫（工学部等部門）発表風景】



【辻村智隆（医学部等部門）発表風景】

3. 各機関の報告内容について

「目標を設定し実行計画を明示し、成果の評価

を行い、運営方法を見直し、実行し、研究系技術職員にふさわしい方式を採用し、技術レベルの適切な評価を行い、専門知識性に加え、個別テーマ指向性の高い専門研究スタッフを目指すところ」、
「法人化に伴い勤務形態が変化しそれに対応したシフト勤務体制をとるところ。所属名と実際の業務とが合わないところの解消を目指す機関」、
「年齢構成に大きな差があり、この対応について現在検討しているところ。大学として技術部を一本化することを検討しているところ」、
「技術力向上、高度技術の提供、業務システムの構築、業務の点検評価、組織見直し、マネジメント強化、業務の点検、評価の実施、報告書の簡素化、労働安全衛生法、研修等を検討しているところ」、
「実習支援、工作機器保守、技術支援、研修、技術交流会、出前講座、地域活動、教育機関等支援、HP作成等を行っているところ」、
「歴史的・実態的評価、中長期的視野、質の向上と育成、組織等の基盤整備、就業・給与規定の作成等を検討しているところ」、
「研究技術職の設置、定年、俸給表、労働時間管理等の検討・整備をしているところ」など各機関の報告があり、組織・運営体制、業務内容の見直し、効率化、技術の向上策等についての種々の改革が進んでいると感じた。



【発表会場風景1】

「大学の技術職員はどうあるべきか」について議論があった。技術系、研究系、事務系、全てが重要という認識が多数で、3本柱が重要との意見が

多かった。また人事権と組織化、いかなる権限を持つことが重要と思うか、大学で技術職が立ち行かなくなれば、共同利用機関にも大きな影響を避けられないのではとの意見が出た。

「大学での技術職員の新規採用への関わり方の現状はどうなのか」の質問もあり、国立大学法人等職員採用試験により採用を行い、区分にない職は選考により採用する方針などの答がかえってきた。採用に際して技術職員が立ち会うことが重要との意見があった。

「今後どういう技術が生き残っていくのか」の議論では、必要な技術者像の観点が重要という意見あった。

「業務依頼」については、既に手続き方法を確立して実施しているところもあったが、業務依頼を公募してみたものの、業務形態がはっきりしていない、誰がやるのか決められない等の理由で対応可能であった依頼に対処できなかった大学もあり、また学外からの業務依頼を望む大学も2、3あったように思う。

「組織の一元化、集中化がすすんでいるが、業務を受けられるか」や業務依頼の取扱いについて検討、兼務している学科等内の支援では技術職員が多くの事務的な仕事をしている、その他に担当している講座・学部・学部外（学外も含む）からの業務があるとの報告もあった。

来年から、外部からの業務の依頼を受けることを検討している、その際、物品の実費をもらい、人件費・技術料等とはとらない。業務報告については、評価が難しく、仕事を遂行した事実を重視しているとの機関もあった。

評価についても活発な意見が多く出され、「誰が技術職員を評価するのか」には、「技術統括に決まっている」との意見もあがった。また評価基準の作成を検討しているところが多かったように思った。自己目標と自己評価をスタートさせた機関もあり、また「採用の面接に参加するとその基準がわかるようになると思う」との意見も出た。

“評価”について語るとき“リーダー論”と関連があるのではないかと、来年のシンポジウムは、この“リーダー論”をテーマにしてはどうかとの提案がなされた。（提案の段階で、まだ決定はしていない）又、今の技術部のリーダーには、マネジメント力も大いに必要とされる時代との意見も多くあった。「大学の技術職員については組織のマネジメントの問題がある」、「マネジメントの問題はどこでも重要である」「複数の部門にまたがる場合のマネジメント力が問われる」との意見が出た。



【発表会場風景2】

法人化後、国家公務員時代よりも、人事・昇格等について「よくわからなくなった」、あるいは「難しくなった」という印象が強いとの意見があった。

文部科学省の給与システムから離れた給与計算システムの導入を検討している機関もあった。

高齢化に伴う諸問題や年齢構成の不均衡は、多くの機関で問題であり、また職務内容の多様さ、複雑さ、職場の分散、奨励研究への申請に対する意識の低さ、定員確保、予算、時間外勤務の保障などの問題点があると報告された。

意見交換では、“アウトソーシングにならない業務”、“アウトソーシングされないようにするには”というテーマについて次々と意見が出された。専門研究スタッフの位置まで技術職員の資質を

高め、組織のみでなく専門的立場におくことを目指して「集約化はおこなわない」と、流れとは逆に向かう機構もあった。

4. おわりに

各機関から発表された現状についての内容は、それぞれの部署で様々であり、技術部組織化の難しさ・課題等が山積みの印象を持った。

各機関によって教員・事務職員・技術職員のそれぞれの関係に開きがあり、技術部に対する評価や取り組みにも開きが見受けられた。現在の与えられた専門業務だけでなく、「多方面に応用が効く」技術も進んで身に付け、昼休みに教員・研究者の部屋に出向いて日常会話の中で依頼者側が何を求めているか等、自分で営業活動等も行う努力が必要になってくる時代に突入したと実感した。

法人化1年のこの時期に、多くの機関の現状や経緯を聞き、他機関の技術部組織化・法人化対策と比較してみると、我々の技術センターはセンター長・研究推進グループの事務職員・技術職員が連携して、1年間やってきたこと自体が大いに評価できると思った。2年目になる17年度は、他機関の推移も参考にしながら多く残された検討課題を、話し合い、ある時は強いリーダーシップによって、出来るところから取り組み、前に動いてみてチェックし、再検討し、組織化して良かったと思うように自分たちで努力したい。

機構長代理で、最初に挨拶された小林先生が言われたように、「法人化で自由度が増したというけれど、技術職員はそれぞれの部署で理想を言うばかりでなく現実に向けて組織運営をしてください」を頭に入れて、協力していきたい。